国際シンポジウム：アジアの伝統的慣習法と近代化政策

「アジアの伝統的慣習法と近代化政策」と題する国際シンポジウムが，1992年11月26・27日の両日，早稲田大学国際会議場で開かれた．

日本法社会学会・比較家族史学会が協賛し，法学，法社会学，文化人類学，地理学，家族社会学等の専門家により，日本，中国，台湾，インドネシア，タイ等について計19本の報告がなされた．

このシンポジウム開催に至る背景には，黒木三郎早稲田大学法学部教授を中心に，1990・91年度に「アジア諸国における諸民族の家族慣習と近代化政策」と題する共同調査が実施されており，その総括報告という意味あいもあった．又，これに先だつ92年5月『アジア社会の民族慣習と近代化政策――黒木三郎古稀記念論文集刊行委員会編』敬文堂，が既刊されている．

対象とされた調査地は，中国の少数民族，とりわけ海南島黎族，雲南省の白族，ハニ族や瑶族に重点がおかれ，北タイや台湾，韓国にまでおよぶ．さらには，日本の民族文化家族慣習の視野も入れて，広く東アジアの比較研究が試みられた．

海外からの来日研究者には，筆者の10余年来の旧友である中国社会科学院法学研究所の陳明侠，タイのチュラロンコン大学のスニー・マリカマールなどが含まれ，日本では大林太良，江守五夫，西村幸次郎らであった．

東アジアの近代化政策の中で，伝統的慣習法がどのように実態として存在するか，その多様性と比較が学際的に追求される視点こそ，今日的斬新さがある．ちょうど時を同じくして海南島など中国の少数民族調査を人口・婚姻・出産の観点から進めてきた筆者にとっては，内容がかなり重複する興味深いシンポジウムとなった．

以上，編集委員会からの依頼により簡単な紹介を記したが，東アジアをテーマとした以下の国際シンポジウムも付記しておきたい．

91年11月13～14日，横浜にて「第3回漢字文化圏フォーラム・世界の中の漢字文化圏」の開催である．溝口雄三，富永健一，中嶋嶺雄らを中心に，世界の東アジア研究のトップが顔をそろえた．イギリスのロナルド・ドーア，中国からは中国社会科学院社会学研究所の張琢，さらには李沢厚ら．

過去2回の会議内容は『儒教ルネッサンスを考える』『漢字文化圏の歴史と未来』として大修館書店より刊行済みである．

いずれにせよ，環日本海構想をはじめ，国境を越えた東アジアへの関心が急速に高まっている昨今である．国際人口移動，男尊女卑の出生性比の解明等，人口問題研究もこれら儒教文化の伝統理解が不可避となっていよう．あわせてこれら他諸学との研究共同の上で，人口問題研究の底流が深められていく必要があろう．

（若林敬子記）

21世紀の子どもと家庭国際シンポジウム

厚生省と愛知県の主催による「21世紀の子どもと家庭国際シンポジウム」が平成4年11月10日（火）名古屋国際会議場において開催された．この会議はわが国近年の出生率低下とその背後にある子育て環境の変化を国際的視野から論議し，今後の子育て施策推進の一助とするため厚生省が愛知県と協力して開催したもので，同趣旨のシンポジウムとしては昨年厚生省が大阪府と協力して開催した会議に続くものである．

会議の次第は以下の通りである．

基調講演

1. Antonio Golini（ローマ大学教授兼国立人口研究所長）
   「イタリアにおける21世紀の子どもと家庭――その概観」
2. Heather E. Joshi（ロンドン大学人口研究センター上級講師）
   「英国における人口と出生率の将来予測」